

甲虫コレクションガイド 12 岩手県立博物館の甲虫コレクション

渡辺修二・千葉武勝

〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷 34 岩手県立博物館 (watanabe@iwapmus.jp)

Beetle Collection of the Iwate Prefectural Museum

Shuji WATANABE and Takekatsu CHIBA

はじめに

岩手県立博物館(図1)は、県政百年を記念して1980年10月に開館した総合博物館で、地質時代から現代にいたる地質・考古・歴史・民俗・生物各分野の資料を展示している。当館の登録資料数は約30万点であり(2018年3月現在)、そのうち生物標本は約17万点と半数以上を占める。登録された生物標本の約半分にあたる約8万3千点が昆虫標本で、複数の標本を登録上では1点としているものがあるため、標本の総数は約11万点である。そのうちチョウ目が約5万点と最も多く、次いでコウチュウ目が約3万9千点である。コウチュウ目の標本の約95%は岩手県で採集されたもので、県内で報告があるコウチュウ目113科3,200種(千葉, 2018)の内、101科1,659種を収蔵している(図2-5)。

当館で収蔵している生物標本の約76%にあたる13万点余りは個人から寄贈されたものである。これらの標本は再同定を行い、当館の様式にそろえたラベルをつけ、データベース(早稲田システム開発株式会社が提供するI.B.Museum SaaS)に採集データと分類情報等を登録して管理している。標本は基本的にはコレクションをそのまま保管するのではなく、分類群ごとにまとめて整理している(図6, 7)。このため、コレクションとして収蔵しているのは以下で紹介する稲庭岳周辺地域生物学

術調査の標本など、一部に限られる(図8)。

登録された標本の一部については、独立行政法人国立科学博物館が運営する科学系博物館情報ネットワークシステムの自然史標本情報検索システム(以下S-net)に、データを整理、整形したうえで提供している。現在までに約9万点の自然史標本データを提供しており、このうちコウチュウ目は8,050点である。

次に当館のコウチュウ目標本コレクションの概要を紹介する。

稲庭岳周辺地域生物学術調査コレクション

岩手県二戸市が2012年から2014年にかけて実施した稲庭岳周辺地域生物学術調査において、筆者の1人である千葉武勝の他、伊達功氏、奥俊夫氏らが採集した標本約3万点からなるコレクションである。確認された種数は約5,200種で、これは岩手県内でこれまでに記録された昆虫約11,000種(千葉, 2018)のおよそ半数にあたる。コウチュウ目は標本数17,000点、約1,600種が採集されており、これも岩手県内で記録のある種の約半数にあたる。調査は二戸市浄法寺の稲庭岳周辺地域において、アクセスが困難な地域を除き可能な限り広い範囲で採集を行い、多いところでは1地域で10回以上採集を行うなどして、地域に生息する昆虫相の全体像を明らかにする目的で行われた。本コレクションはこの地域に出現する種の大部分を網羅すると考えられ、地域の昆虫相を示すモデルケースになる調査資料である。現在、順次標本を受け入れている途中で、これまでに登録された約8,000点について、S-netにデータを提供した。このうちコウチュウ目は4,338点、24科504種が含まれる。

春子谷地生物相調査コレクション

春子谷地は岩手山麓の標高450mにあり、面積は約16haと岩手県内最大規模の湿地である。環境省が定める生物多様性保全上重要な湿地(重要



図1. 岩手県立博物館の外観。



図2. イワテセダカオサムシ *Cychrus morawitzi iwatensis* Nakane, 1989 の標本.



図4. ハヤチネミズギワゴミムシ *Bembidion (Peryphus) hayachinense* Nakane, 1979の標本.



図3. ハヤチネヌレチゴミムシ *Apatrobus hayachinensis* Nakane, 1968の標本.



図5. ミチノクケマダラカミキリ *Agapanthia daurica sakaii* Hayashi, 1982の標本.

湿地 500) にも選定されている。2007年から2009年にかけて、当館職員を含む春子谷地生物相調査グループによって動植物相の野外調査が行われた(春子谷地生物相調査グループ, 2008, 2010)。本調査に関して採集された昆虫標本のうち、1,861点が当館に収蔵されており、低層湿地における昆虫相の概要を把握できるコレクションとなっている。コウチュウ目の標本は679点で、33科268種が含まれる。このうち278点についてはS-netにデータを提供済みである。

栗駒国定公園調査標本コレクション

2004年に行われた、栗駒国定公園における指定動物選定に係る生息状況調査で採集された昆虫標本が当館に収蔵されている。調査地は須川岳(栗

駒山)、焼石岳、牛形山、経塚山で、9月初めから10月初めまでの期間で採集された。確認された昆虫類484種のリストが作られたが、標本は未整理の状態、コウチュウ目は調査区ごとにまとめて液浸標本となっている。短い調査期間の資料だが、この時期における公園内の昆虫相の概要を把握できる資料であり、今後標本および採集データの整理を行い、S-net等で公開したいと考えている。

中村七三(なかむらしちぞう)コレクション

盛岡市の中村七三氏(故人)が収集したコウチュウ目の標本4,233点で、21科708種を含む。これらのうちの約3,400点についてはS-netにデータを提供済みである。中村氏は自身でも採集を行ったほか、県内各地の中学校に採集用具を提供し、採集されたものを集めるなどして県内の広い範囲から標本を収集した。当館では開館準備中である1980年3月に中村氏のコレクション約600点を購入し、その後、多くの標本の寄贈を受けた。標本のほとんどは岩手県産であり、主に1956年から1972年ころに採集されたもので、古いものでは1932年から1942年に採集されたものもある。オサ



図8. コウチュウ目標本を配架している収蔵棚。



図7. 分類群ごとに整理済みの標本。



図8. 稲庭岳周辺地域生物学術調査コレクション（一部）。



図9. 未整理のまま箱詰めされている標本。

ムシ科が 139 種 1,000 点と最も多く、次いでカミキリムシ科 114 種 699 点、ハムシ科が 122 種 612 点である。オサムシ科のうち、ゴミムシ類については、その他のコレクションと合わせて岩手県のゴミムシ類（佐竹・笠原，1985）に目録としてまとめられている。ハネカクシ科の標本 129 種 581 点と、コメツキムシ科の標本 76 種 474 点は、中村氏が立ち上げた岩手甲虫学会から、それぞれ岩手県産鞘翅目仮目録 1, 2 として発表された（渡辺・佐藤，1968；大平・中村，1970）。目録発表に使われた標本は専門家の同定を受けており、ハネカクシは渡辺泰明氏が、コメツキムシは大平仁夫氏が同定した。

奥昭夫（おくあきお）コレクション

元教員で、二戸市史編さん室嘱託員であった奥昭夫氏から 2017 年に寄贈された昆虫標本 5,585 点のコレクションである。標本のほとんどは岩手県二戸市で採集されたもので、折爪岳・馬仙峡県立自然公園で 1997 年から 2007 年に採集したものなど、特定の地域で集中して採集された標本が含まれている。採集された標本は、チョウ目、コウチュウ目、カメムシ目、ハチ目、ハエ目など分類群も幅広く、岩手県の県北地域の昆虫相の概要を

把握できるコレクションとなっている（奥，2000，2011）。コウチュウ目ではカミキリムシ科が多く、戦前や戦中に採集されたカミキリムシ標本も含まれている。現在までに 1,457 点の整理を終えており、S-net にデータを提供した。

千葉武勝（ちばたけかつ）コレクション

筆者の一人で、元岩手県農業試験場研究員で、現在は当館の研究協力員である千葉武勝が寄贈した標本である。岩手県内の広い範囲で 1961 年から 2010 年までに採集された標本約 27,000 点からなるコレクションで、このうち約 22,000 点については S-net にデータを提供済みである。コウチュウ目は約 13,000 点あり、48 科 1,118 種が含まれる。今後多くの標本を寄贈予定である。

おわりに

以上のように、当館では岩手県で採集された標本に特化して収集を行っている。採集情報はデータベースに登録されており、県内における分布やその年代による変化を調べられるデータを蓄積している。当館には昆虫のタイプ標本はなく、また希少種が数多く収蔵されているわけでもないが、このように地域の昆虫相を把握できるコレクショ

ンをそろえることが、地方の博物館の重要な役割であると考えている。そのために、今後も県内各地で計画的に採集を進めることや、標本寄贈の積極的な受け入れを行っていく必要がある。

しかし、当館においても収蔵スペース不足は深刻な問題となっている。ここ2年ほど大きなコレクションの寄贈が続き、2016年は約39,000点、2017年は約12,000点の昆虫標本を受け入れており、今年度も数千点の標本を受け入れている。これらの標本については柵の追加や動物剥製の収蔵棚を整理するなどして仮置き場を確保したが、もはや小手先の対策では対処が難しい状況である。また、標本を配架している電動棚が老朽化し、動きが悪くなっているところが出てきたが、部品交換用のパーツがメーカーにも残っていないため、いつ完全に停止してしまうか薄氷を踏む思いで使用している。しかし、収蔵庫の増設や改修については、未だに具体的な計画が立てられる状況になく、これらの問題の解決について明確なビジョンを持っていない。

寄贈された標本の整理、同定は主に研究協力員や岩手虫の会のボランティアなどの協力を受けながら進めている。しかし、チョウ目など愛好家の多い分類群を除き、地方では昆虫の専門的な同定を行うことができる者は少ないため、寄贈される標本数の増加ペースに対応できず、やむなく長期間整理待ちとなっている標本も多い(図9)。これまで当館に分類学の専門家が昆虫担当芸員として着任したことはなく、主に県の教育委員会から派遣された生物の教員が担当してきた。この中には、筆者の一人、渡辺のように、分類学的なトレーニングをほとんど受け

てこなかった者もあり、寄贈された昆虫標本の整理が進まないことの一因となっている。今後、専門的な技能を必要としないデータ入力や、再同定済みの標本の整理等については、アルバイトを雇用するなどして標本整理を推進したい。筆者らも更に標本整理に力を入れ、貴重な標本が多くの人々の研究に使えるよう整理を進めていきたい。

謝辞

これまで当館に標本を寄贈してくださった方々、標本の整理に協力いただいた方々に厚く御礼申し上げる。また、執筆の機会をいただいた本誌編集委員の奥島雄一氏(倉敷市立自然史博物館)に感謝する。

引用文献

- 千葉武勝, 2018. 岩手県内から記録された昆虫の種数. 岩手虫の会2018年2月例会資料.
 春子谷地生物調査グループ(編), 2008. 春子谷地生物相調査報告書, 84 pp., 春子谷地生物相調査グループ, 盛岡市.
 春子谷地生物調査グループ(編), 2010. 春子谷地生物相調査報告書2, 48 pp., 財団法人岩手県文化振興事業団, 盛岡市.
 奥 昭夫, 2000. 二戸市の自然1, 153 pp., 岩手県二戸市まちづくり推進課.
 奥 昭夫, 2011. 二戸市の自然2, 126 pp., 岩手県二戸市市民協働部地域づくり推進課.
 大平仁夫・中村七三, 1970. 岩手県産鞘翅目仮目録2, 36 pp., 岩手甲虫学会, 盛岡市.
 佐竹邦彦・笠原須磨生, 1985. 岩手県のゴミシ類, 岩手県立博物館研究報告, (3): 169-194.
 渡辺泰明・佐藤光子, 1968. 岩手県産鞘翅目仮目録1, 25 pp., 岩手甲虫学会, 盛岡市.

(2018年8月27日受領, 2018年9月8日受理)

【短報】ケシマルムシ属微小甲虫を神奈川県で採集

ケシマルムシ科 Sphaeriidae は、ツブミズムシ亜目 Myxophaga を構成する科の1つで、単一のケシマルムシ属 *Sphaerius* から成る。本属は南極大陸を除き広く分布しているが、世界でわずか23種しか知られていない小さな分類群である(Mesároš, 2013)。ケシマルムシ属の一種 *Sphaerius* sp. は、以下に述べる通り、国内でこれまでに4例の採集報告がある。今回、筆者は新たに神奈川県平塚市で本種(図1)を採集したので、ここに報告する。

1 ex., 神奈川県平塚市寺田縄(県立花と緑のふれあいセンター), 27. VII. 2018, 平野幸彦保管; 1 ex., 同所, 13. VIII. 2018, 筆者保管(いずれも筆者採集)。

採集場所は、平塚市にある通称「花菜ガーデン」の敷地内にある水田である(図2)。上記の記録に数日先立ち、7月21日に同所を訪れたところ、水

田内にチビゲンゴロウやキベリヒラタガムシが多数動き回っているのを確認した。他に何かおもしろい虫はいないかと、水際の泥をスプーンで浅く削り、水と掻き混ぜて水面に浮いてくる微小甲虫を探していたところ、1時間ほどの探索で、本種と思しき個体を3頭得ることができた。しかし、そのあまりの微小さゆえうまく標本化できなかったため、後日同所を訪れ、上記の通り追加個体2頭を得た。体長はいずれも約0.7 mmと大変微小で、水面に浮いた個体は丸くツヤのある甲虫らしきものとして目視でギリギリ判別できるレベルであった。追加個体はいずれも2時間ほど探索してようやく得られたもので、個体密度はそれほど高くないようである。

実体顕微鏡で観察すると、触角先端は球桿状で、球桿部に長毛が生えているのが確認できた。(図1)。